

スポーツ系コース在籍学生の障害者との接触意欲と スポーツ実施困難についての認識

Contact will with person with disability and recognition about their difficulties of playing sports together on university student in sports course

大山 祐太*・増田 貴人**

Yuta OYAMA*・Takahito MASUDA**

【要旨】

大学生の障害に対するイメージとスポーツ実施の困難性の認識について検討した。大学生420名を対象に質問紙調査を実施した結果、次のことなどが確認された。①接触経験のある障害種は「知的障害」が最も多かったが、今後の接触意欲としては「発達障害」や「精神障害」と同様低い水準にあり、接触意欲には障害の主訴の明瞭性とコミュニケーションの容易さが影響していることが伺われた。②「一緒にプレーをするのが困難な障害」として、男性は「視覚障害」、女性は「精神障害」と回答する割合が高く、男性は「プレーヤー（相手）」の「機能的」側面、女性は「自身」の「心情的」側面から回答したことが推察された。③スポーツ系コースに在籍の学生は「視覚障害」「知的障害」とスポーツをすることを困難と認識し、非スポーツ系コース在籍の学生は「わからない」「違いはない」と回答する割合が高かったことから、スポーツ経験の差異がイメージの具体性に影響を及ぼした可能性が考えられた。

I. はじめに

近年、障害者の権利条約批准に伴い、障害者が豊かに生活できるよう、文化的活動や社会参加の重要性が指摘されている。特に「スポーツ」に関しては、「障害者白書」において「日々の暮らしの基盤づくり」の章で扱われている（内閣府, 2013）ように、日々の生活と密接なかかわりがある活動であり、社会的関心も高まっている。障害者のスポーツは、傷痍軍人の機能回復を目的としたリハビリテーションを起源とするが、現在は実践者のニーズに応じて、エリートスポーツとしての側面や生涯スポーツとしての側面ももつなど、多面性ある活動となっている。平成23年に施行されたスポーツ基本法の基本理念には、「スポーツは、障害者が自主的かつ積極的にスポーツを行うことができるよう、障害の種類及び程度に応じ必要な配慮をしつつ推進されなければならない」と明記され、これまで厚生労働省の管轄であった障害者のスポーツ振興事

業は、文部科学省に一元化された。2020年には東京でオリンピック・パラリンピックが開催されることもあり、今後一層、障害者のスポーツ振興に注力がなされ、障害者にとってスポーツが身近な活動となることが想定される。地域のスポーツイベントやスポーツ教室に、当たり前前に障害者が参加する機会が増えてゆくであろう。

しかし、制度や物的環境については整備が進められ改善されてきたものの、地域住民の障害についての正しい理解や、誤解や偏見の解消には至っていないのが現状である。例えば内閣府（2012）の「障害者に関する世論調査」では、世の中に障害を理由とする差別や偏見が「あると思う」と回答する者が約9割存在し、平成19年の調査時よりも増加していた。また、差別・偏見の改善状況についても、「改善されている」という回答が減少し、逆に「改善されていない」という回答が増加する結果となっていた。

* 北海道教育大学岩見沢校 スポーツ教育課程

Department of Sport Education, Iwamizawa Campus, Hokkaido University of Education

** 弘前大学人文社会・教育学系（特別支援教育）

Department of school education (special needs education), Faculty of education, Hirosaki university

昨今のインクルーシブ教育の推進や共生社会の実現を目指すうえでは、社会全体の偏見や差別解消に向けた取り組みが重要といえ、そのためには障害者に対するイメージや抵抗感について現状を把握することが求められる。さらに2020年東京オリンピック・パラリンピックを控え、平成27年には、パラリンピック種目を小中高の体育授業で導入する事業が始められた。前述したように、誰もが豊かに生きるための手段として「スポーツ」に期待が寄せられているといえる。

そのなかで、インクルーシブな体育・スポーツ身体活動の振興や環境構築をどのように担っていけばいいのか、生涯学習の視点から見ても教員やスポーツ指導員を目指す学生への期待や役割は重い。彼らには、障害に関する知識や理解、万人と共にスポーツを楽しむための姿勢・技術の獲得が求められるが、言い換えれば大学が共生社会実現にむけて、どのような役割を果たせるのだろうか。

それらをふまえ、本研究では、インクルーシブ体育、なかでも大学生の障害に対するイメージと障害者との接触経験を中心に研究を概観するとともに、大学生の障害に対するイメージとスポーツ実施の困難性の認識について検討することを目的とする。

Ⅱ. 大学生の障害者に対する態度研究の概観

障害者に対する態度形成に関しては、理念的観念的な次元では受容的でありながらも、自身との直接的関わりが深くなる次元では忌避的な面があるという実態が報告されている（生川，1995）。障害者の社会参加が進めば、これまで障害者と接触することがなかった者も、障害者と接触する機会が増えてゆくこととなるが、障害者に対する否定的な態度は行動として現れることが指摘されている（Heinemann et al, 1981）。また、特に精神障害者施設の建設にあたっては、精神障害者に対する危険視・無理解などから地域住民による苦情・反対運動が発生することがあり、施設と住民とを仲介する役割が重要であることが報告されている（野村，2012）。このように、障害者に対する否定的イメージ・忌避的態度は、障害者にとっての現実的な障壁として発現する可能性があることから、インクルーシブな教育・地域サービスの提供者となる大学生には平等意識の醸成が求められている。

これまで、大学生を対象とした障害者に対する態度研究については多くの知見が蓄積されており、とりわけ所属専攻による差異については重要な議論の一つとなっている。例えば、豊村（2004）の調査による

と、非福祉系学部 of 学生に比べ、介護専門学校の学生と福祉系学部の学生は、知的障害・身体障害・精神障害に対してより受容的態度を示していた。生川・那須（2001）も、知的障害者に対する態度について多次元的に分析し、社会福祉学科の学生と非社会福祉学科の学生の比較検討したところ、「社会参加同意」などの項目で社会福祉学科の学生の方が好意的であるなど、専攻による差異を報告している。さらに坂野ら（2010）は、精神障害者に対するスティグマ的反応について、看護系学生、社会福祉系学生、人文社会系学生、理工系学生の順に反応が小さい傾向を示している。このように、福祉系や看護系など、将来的に障害者との直接的接触を前提とする専攻の学生は、障害者に対して比較的理解的であると言える。

しかし、インクルーシブ教育・障害者の社会参加が推進されている昨今では、業種に関わらず障害者との接触が想定され、特に「スポーツ・体育」関連の業種においては指導者が果たす役割は大きい。スポーツを通じた接触体験は、障害者に対する平等意識の醸成を促すことが指摘されており（Tripp et al, 1995. 安井，2004.）、教育現場においては、「体育」にインクルーシブな授業展開が期待されている（草野，2003）。特に小学校では、体育を通常学級と障害児学級合同で実施することが多く（安井，2007）、体育の専門性と障害児指導の専門性の両方を高める教員養成が求められている（齊藤，2008）。

体育・スポーツ系学生を対象とした調査としては、角南ら（2014）が人文系・幼児教育系・体育系学生の障害者に対する意識について比較し、ネガティブイメージと日常生活困難感に関して、体育系学生が他の専攻学生よりも低値を示したことを報告している。また、澤江ら（2011）は、体育専攻学生と非専攻学生との比較検討から、興味・関心についての因子と各専攻における因子間の関連性について明らかにし、スポーツそのものへの興味・関心を高めることが障害者のスポーツに対する関心を高めることに繋がりうることなど、教育内容について重要な示唆を得ている。その他にも、障害者スポーツに対する意識や関心について所属専攻による比較をおこなっている研究は散見されるが（例えば、川田・山本，1999. 永浜，2013など）、「障害種」に言及して検討している研究は確認できない。相手のもつ障害の種類によっても抵抗感に差異が生じる（河内，2006）ことから、接触意欲やスポーツの困難性など、障害種ごとにイメージを確認する必要があると考える。

Ⅲ. 障害者との接触に関する意識調査

1. 方法

前章の概観、接触意欲やスポーツの困難性など、障害種ごとにイメージを確認する必要があると考え、本研究では、A大学の学生420名を対象とし、調査を実施した。それぞれスポーツ系コースに在籍する学生（以下スポーツ系）及び在籍しない学生（以下非スポーツ系）が混在する授業にて質問紙を配布した（2013年～2014年の各4・6月）。有効回答は405、回収率は96.4%であった。横断的時系列変化を確認したい意図から、入学間もない1年次と3年次を対象に配布した。

2. 調査の内容

質問紙では、①個人の属性（性別・学年・専攻）、②障害者との接触経験（接触経験の有無・接触相手の障害種別）、③障害者と関わることの抵抗感、④障害者との接触意欲、⑤障害者とのスポーツ困難性の認識、について尋ねた。

障害種別は図1のように捉えられる（日本障がい者スポーツ協会, 2013）が、体系的な分類が必ずしも大学生の障害種別の認識と一致していないことが想定されたため、予備調査として大学生15名を対象に知っている障害について回答を得、その結果をふまえて選択肢を設定した。具体的には「内部障害」が用語・障害種としてもまったくと言っていいほど認知されておらず、「精神障害」については統合失調症やパニック障害などが該当すると認識されていたが、自閉症やADHD、LDに関しては範疇ではなく「発達障害」として認識されていた。結果、回答（イメージ）のしやすさを考慮し、選択肢を「身体障害（手や足）」、「視覚障害」、「聴覚障害」、「知的障害」、「精神障害」、「発達障害（自閉症やLD）」、「その他の障害」とした。

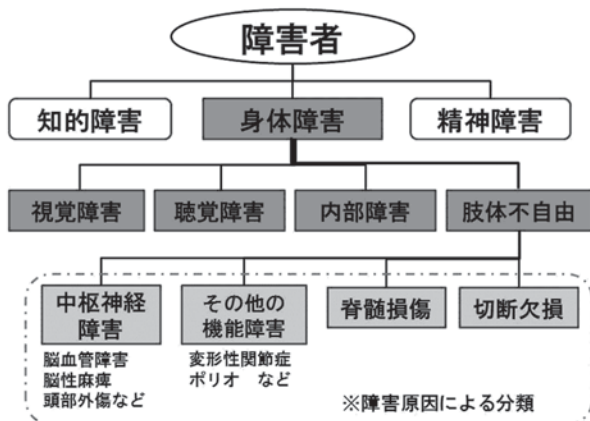


図1 障害の体系的な区分

②に関しては、障害者との接触経験が「ある」者に対して、その接触した相手にどのような障害があったか障害種別を複数回答で確認した。

③の抵抗感については「障害者とかかわることについてどう思いますか?」という設問で、「1. 抵抗がある」「2. 少し抵抗がある」「3. 特に意識しない」「4. あまり抵抗はない」「5. 抵抗はない」の5件法によって確認をした。

④に関しては、「関わりとすればどんな障害の方と関わりたいですか」という質問項目を設け、障害種の選択肢の他、「どれでも構わない」「どれも関わりたくない」「わからない」の選択肢から、単一回答法によって回答を得た。

⑤のスポーツ困難性に関しては、「あなたが一緒にプレーをするとしたら、どんな障害の方とプレーするのが最も難しそうですか」という設問において、障害種の選択肢及び「どれも違わない」「わからない」の中から、単一回答法で回答を得た。

3. 分析

フェース項目や障害者との接触経験は単純集計を行いグラフ化した。

抵抗感については、「3. どちらとも言えない」を「0点」とし、「1. 抵抗がある」を「-2点」、「2. 少し抵抗がある」を「-1点」、「4. あまり抵抗はない」を「1点」、「5. 抵抗はない」を「2点」と換算して、属性ごとに二群の平均点を対応のないt検定により比較した。

接触意欲・スポーツ意欲に関しては、障害種を横軸、各属性を縦軸としてクロス集計し、 χ^2 検定を行った。

データの集積・統計的処理はIBM SPSS® Statistics Desktop Ver.22を用いた。

Ⅳ. 結果

1. サンプルの属性

サンプルの属性を表1に示す。

項目		スポーツ系	非スポーツ系	合計
性別	男性	137	33	170
	女性	78	157	235
学年	1年	82	155	237
	3年	133	35	168
計		215	190	405

表1 サンプルの属性

2. 障害者との接触経験

障害者との接触経験は、8割以上が「ある」という結果であった（図2）。また、「接触相手にどのような障害があったか（複数回答）」確認すると、最も回答が多かったのは「知的障害」（163, 30.4%）で、次いで「身体障害（手や足）」（138, 25.7%）、「発達障害（自閉症やLD）」（110, 20.5%）となっていた（図3）。

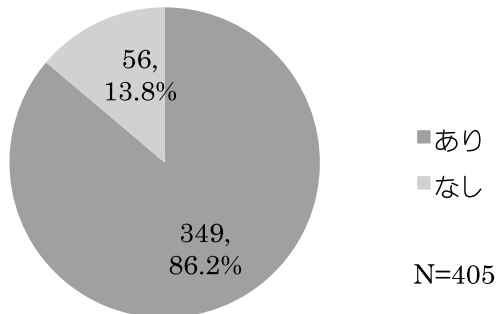


図2 障害者との接触経験

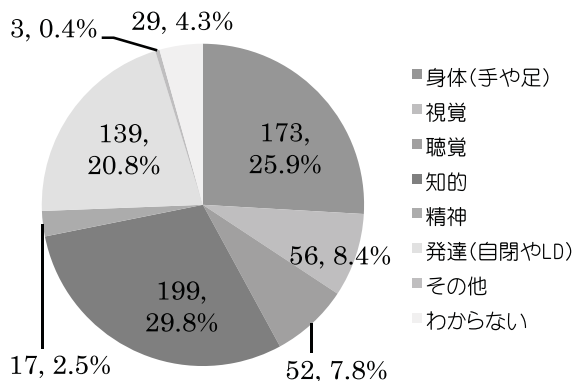


図3 過去に接触した障害（複数回答）

3. 障害者に関わることの抵抗感

障害者に関わることの抵抗感（全体）については図4の通りであった。また、回答を数値化し、性別（男－女）、専攻（スポーツ系－非スポーツ系）、学年

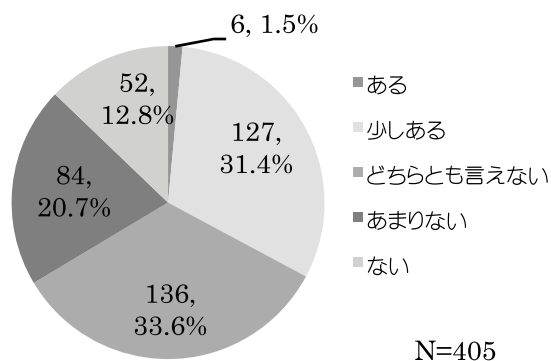


図4 障害者に関わることの抵抗感（全体）

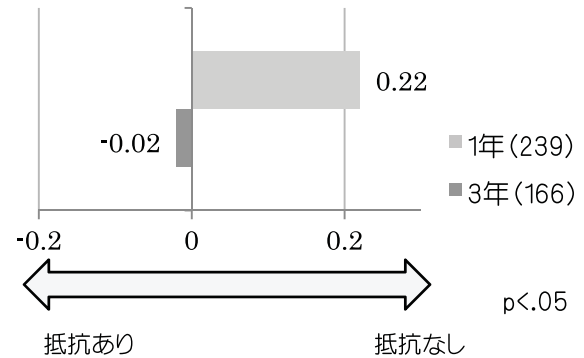


図5 学年による抵抗感得点の差

（1年－3年）ごとに二群の得点を比較したところ、学年において有意な得点差が確認された（ $t(383.51) = 2.41, p < .05$ ）（図5）。

4. 障害種別の接触・スポーツ意欲

障害者との接触意欲については、最も多い回答が「どれでも構わない」（145, 35.8%）であり、次いで「身体（手や足）」（89, 22.0%）、「わからない」（53, 13.1%）となっていた（図6）。逆に、「その他の障害」は選択されておらず、「知的障害」（14, 3.5%）や「精神障害」（8, 2.0%）も低い回答率となっていた。また、属性ごとの回答の傾向を確認するため、クロス集計を行った結果、性別において有意な度数の偏りが確認された（ $\chi^2 = 18.63, df = 8, p < .05$ ）（図7）。

5. 共にプレーする困難性の認識

一緒にプレーをするとしたら、どんな障害の方とプレーするのが最も難しそうかについては、「視覚障害」（87, 21.5%）、「知的障害」（67, 16.5%）、「精神障害」（64, 15.8%）の順で多く回答されていた（図8）。属性ごとの回答の傾向を確認すると、性別（ $\chi^2 = 26.96, df = 7, p < .001$ ）と、所属専攻（ $\chi^2 = 25.24, df = 7, p < .01$ ）において有意な度数の偏りが確認された（図9）。

V. 考察

1. 障害種による抵抗感の差異

障害者に関わることの抵抗感について、回答を3つに大別すると、「ある・少しある」は133、「ない・あまりない」は136、「どちらとも言えない」は136と、ほぼ同数となっており、約3分の1が抵抗があるという認識であった。

障害者に対するイメージ・態度の肯定的変容には、障害者との接触機会が重要であることが指摘されているが、本研究においては、事前に接触したことのある

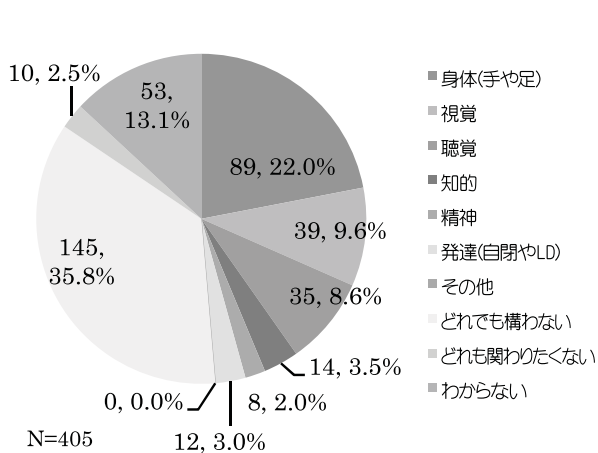


図6 今後関わりたい障害（全体）

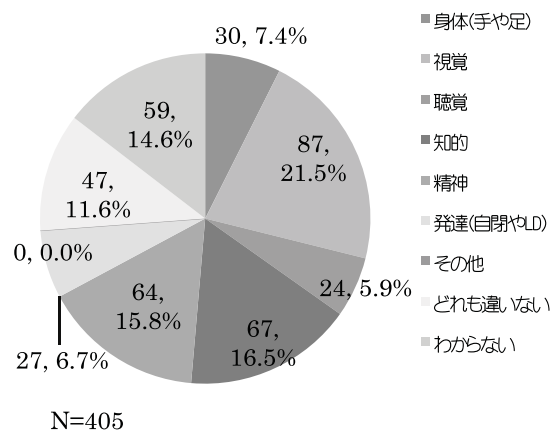


図8 一緒にプレーするのが難しい障害（全体）

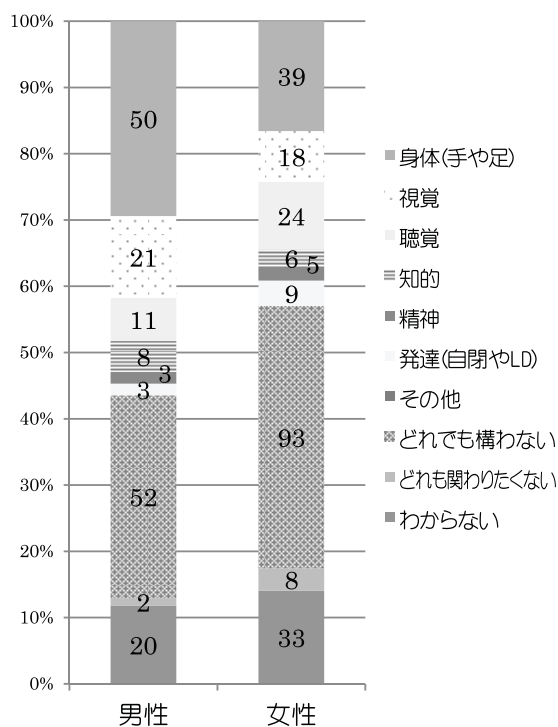


図7 今後関わりたい障害（男女比較）

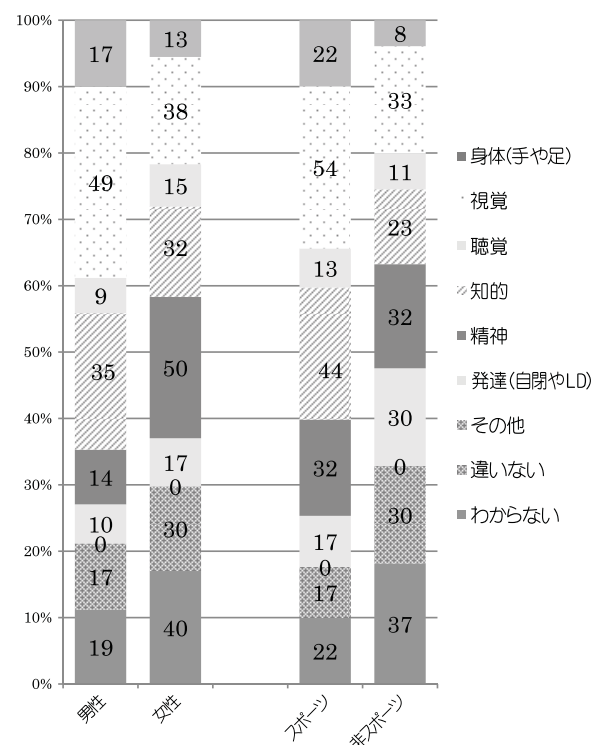


図9 一緒にプレーするのが難しい障害（男女・所属比較）

障害種としては「知的障害」が199（複数回答）と最も多かったものの、今後関わりたい障害種としては、回答数が14（3.5%）と低い水準にあった。同様に、「発達障害（自閉やLD）」も、接触経験は139（複数回答）と3番目に多かったが、今後関わりたいと選択されたのは12（3%）となっていた。一方、「身体障害（手や足）」は、「わからない」「どれでも構わない」などを除外すると、ほぼ半数の者に選択されており、視覚障害、聴覚障害も比較的高い回答率であった。「知的障害」「発達障害（自閉やLD）」と同様、「精神障害」も8（2%）と積極的には選択されていないこ

とから、接触意欲には障害の主訴の明瞭性とコミュニケーションのとりやすさが影響しているものと思われる。「身体障害（手や足）」は、四肢の欠損や機能不全などがイメージされやすく、言語・認知機能に障害はないという認識があるが、知的障害者や発達障害者は言語でのやり取りの困難性や社会的相互作用の特異性などから、円滑なコミュニケーションが取りにくいと場合も多い。

障害者との接触機会に関しては、特にポジティブな経験となるよう事前に設計・準備されている場合は接触後に好ましい態度形成を促す（Block & Zeman,

1996. 田川・由良, 1992. 岩橋ら, 2012など) が、障害者との接触経験が好意的態度の形成に結びつかなかったり、より否定的態度になる可能性も指摘されており (Okolo & Guskin, 1984. 益山ら, 2008など)、その接触の「質」が重要であるといえる。今回、知的障害者や発達障害者と接触機会のある者は多かったが、積極的には接触を期待されなかったということは、調査対象の過去の接触がポジティブなものではなかった可能性が考えられる。障害者との接触前の知識獲得が後の態度形成を肯定的な方向に促す (大谷, 2001) ことや、障害者との接触経験がなくとも知識獲得とアダプテッド・スポーツ体験で否定的な障害者イメージが払拭される (大山, 2015a) ことから、やみくもに接触機会を作るのではなく、様々な障害についての正しい基本的な知識を獲得させることが重要であろう。

また、抵抗感得点が1年生の方が3年生よりも高く、抵抗が「少ない」傾向にあったことは、序論でも述べたような「総論賛成各論反対」 (生川・安河内, 1992) が背景に伺える。質問紙調査では、社会一般的に好ましいとされる回答をする傾向がある (Edwards, 1953)。1年生は障害者に対する抵抗感や接触意欲について問われたため、一般論として「否定的な意思を示すべきではない」と回答し、1年次と比べて授業や介護等体験などで障害者と直接的且つ具体的に関わる機会も多い3年生は、自身の率直な意識と向き合って回答したのではないだろうか。

2. 障害イメージの属性による差異の検討

「一緒にプレーをするのが困難な障害」については、男性は視覚障害、女性は精神障害と回答する割合が高かった。これは、「一緒にプレーをするとしたら、どんな障害の方とプレーするのが最も難しそうですか」という設問の解釈の違いによるものと推察される。つまり、問われている困難性を、男性は「プレーヤー (相手)」の「機能的」側面から、女性は「自身」の「心情的」側面から解釈したのではないかということだ。Mehrabian & Epstein (1972) は大学生の emotional empathy (感情的共感) を測定し、男性よりも女性の方が共感性が高いことを報告しており、大山 (2015b) も、知的障害者へのスポーツ指導記録の傾向に関して、男性よりも女性の方が選手の状態・心情に関心事とした記述が多いことを示唆している。女子学生は、精神障害者に対して一般論としては受容的・理解的でありながらも個人としては忌避的な面があることが指摘されており (中村・川野, 2002)、精神障害者に対す

るネガティブイメージが「共に」プレーすることの心情的困難性に結びつき、男子学生は、プレーする相手の機能面を考慮し、情報量の多い視覚に障害があることを共にプレーする際の困難として認識したと解釈できる。

「一緒にプレーするのが困難な障害」に関しては、スポーツ系・非スポーツ系の学生を比較すると、非スポーツ系の学生は「わからない」「違いはない」の割合が高く、スポーツ系は「視覚障害」「知的障害」の割合が高い傾向が確認された。この差異は、スポーツ経験の質・量の違いに起因するものと推察される。非スポーツ系の学生は、専門とする競技をもたずない自分自身がスポーツに対する苦手意識を持つケースが多いことが伺え、「一緒にプレーをする」競技を具体的にイメージできず、こういった心身機能の欠如がどのような困難性を有するか判断できなかったのではないだろうか。一方スポーツ系の学生は、それぞれが専門とする競技において一緒にプレーすることを想定し、その場合こういった心身機能が重要かという観点から判断したと考えられる。健常の大学生が取り組む多くのスポーツは視覚情報に頼らざるを得ず、チームスポーツは特に意思疎通や戦術の理解が要求されるため、視覚障害と知的障害がある者とプレーすることに困難性を感じたのではないだろうか。

いずれにしても、大学において障害に関する基本的な知識の獲得と理解を深める機会を作る必要があると考える。特定障害への抵抗感や否定的イメージが仮にあるのだとすれば、それは払拭するべきであろうし、例えばゴールボールやブラインドサッカーなど、視覚障害があっても共に楽しめる競技があることなども、体験を通して学んでゆくことが求められる。

VI. 今後の課題

今回は障害種について質問項目を設けたが、回答者の前提知識によっては、本来の回答との齟齬が生じうるため、その選択肢の妥当性については議論が必要であろう。また今回は、接触時の自発性の有無や、障害者と初めて接した時期、身内・友人の存在など、回答者の詳細な情報を得ることはかなわなかった。今後、障害に対するイメージについて様々な視点から詳細に分析する必要がある。

参考文献

Block, M.E. Zeman, R. (1996) : Including Students With Disabilities In Regular Physical Education: Effects

- on Nondisabled Children. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 13 : 38-49.
- Edwards,A.L (1953) : The Relationship Between the Judged Desirability of a Trait and the Probability That the Trait Will Be Endorsed. *The Journal of Applied Psychology*, 37 (2) : 90-93.
- Heinemann,W. Pellander,F. Vogelbusch,A. Wojtek,B. (1981) : Meeting a deviant person : Subjective norms and affective reactions. *European Journal of Social Psychology*, 11 : 1-25.
- 岩橋由佳・相本広幸・藤原秀文・井上雅彦 (2012) : 知的障害のある児童に対する交流学級児童のかかわり行動を促進させるための障害理解授業の効果. *特殊教育学研究*, 49 (5) : 517-526.
- 川田公仁・山本哲也 (1999) : 大学体育の授業における障害者スポーツの試み：シッティングバレーボールを用いて. *つくば国際大学研究紀要*, 5 : 111-122.
- 河内清彦 (2001) : 視覚障害学生及び聴覚障害学生に対し大学生が想起するイメージの意味構造一性及び専攻学科との関連一. *教育心理学研究*, 49 : 81-90.
- 草野勝彦 (2003) : 改めて体育の可能性を問うー体育でノーマライゼーションの具体化をー. *体育科教育*, 8 : 10-13.
- 益山篤子・東原文子・河内清彦 (2008) : 通常学級における知的障害児に対する級友の態度に及ぼす接触および性別の影響について. *障害科学研究*, 32 : 1-10.
- Mehrabian,A., Epstein,N. (1972) : A measure of emotional empathy. *Journal of personality*, 40 : 525-543.
- 永浜明子 (2013) : 「アダプテッド・スポーツ」「障がい者スポーツ」に対する大学生の認知度および意識レベル : アダプテッド・スポーツ導入に向けた授業自己評価の観点から (第3報). *大阪教育大学紀要 第5部門, 教科教育*, 61 (2) : 47-60.
- 内閣府 (2012) : 障害者に関する世論調査.
- 内閣府 (2013) : H25年度版障害者白書 : 146-150.
- 中村真・川野健治 (2002) : 精神障害者に対する偏見に関する研究ー女子大学生を対象にした実態調査をもとにー. *川村学園女子大学研究紀要*, 13 (1) : 137-149.
- 生川善雄 (1995) : 精神遅滞児 (者) に対する健常者の態度に関する多次元的研究ー態度と接触経験、性、知識との関係一. *特殊教育学研究*, 32 (4) : 11-19.
- 生川善雄・安河内幹 (1992) : 精神薄弱児 (者) に対する態度と接触経験・ボランティア経験との関係に関する研究ー福祉保育教育系女子大生の場合一. *発達障害研究*, 13 (4) : 302-309.
- 生川善雄・那須理絵 (2001) : 知的障害者に対する大学生の態度構造 : 専攻、性と関連づけての検討. *東海大学健康科学部紀要*, 7 : 45-52.
- 日本障がい者スポーツ協会 (2013) : 障害者スポーツ指導教本 初級・中級 (改訂版). 株式会社ぎょうせい, 東京 : 26.
- 野村恭代 (2012) : 精神障害者施設における施設コンフリクトの実態. *社会福祉学*, 53 (3) : 70-81.
- Okolo,C. and Guskin,S.(1984) : Community attitudes toward community placement of mentally retarded persons. *International Review of Research in Mental Retardation*, 12 : 25-66.
- 大谷博俊 (2001) : 交流教育における知的障害児に対する健常児の態度形成ー態度と事前指導における情報提供、交流経験、評価対象となる知的障害児の特定との関連性の検討一. *特殊教育学研究*, 39 (1) : 17-24.
- 大山祐太 (2015a) : アダプテッド・スポーツ授業が小学生の障害者イメージに与える影響. 第36回医療体育研究会/第19回アダプテッド体育・スポーツ学会 第17回合同大会プログラム・抄録集 : 57.
- 大山祐太 (2015b) : 知的障害者のスポーツ活動における指導記録の記述に関する検討. *アダプテッド・スポーツ科学*, 13 : 11-22.
- 齊藤まゆみ (2008) : A 県小学校における障害のある児童の体育実施状況. *スポーツ教育学研究*, 27 (2) : 73-81.
- 坂野純子・菊澤佐江子・的場智子・山崎喜比古・杉山克己・八巻知香子・望月美栄子・笠原麻美 (2010) 精神障害者に対する大学生のスティグマ的反応尺度の因子構造と関連要因. *岡山県立大学保健福祉学部紀要* 17, 19-25.
- 澤江幸則・齊藤まゆみ・柄田毅・井田智之・村上祐介・牧佑耕・荒川歩美・中原陽子 (2011) : 体育専攻学生のアダプテッド・スポーツ活動への関心を高めるための教育内容について : 非体育専攻学生との比較を通して. *障害者スポーツ科学*, 9 (1) : 35-45.
- 角南良幸・鍵村昌範・下園博信 (2014) : 障害者スポーツに対する女子学生の意識に及ぼす影響 : 専攻学科および運動経験の関係について. *人間関係学部編*, 15 : 49-55.
- 田川元康・由良妙子 (1992) : 障害児に対する小学生の態度形成ー統合教育・交流教育の影響一. *和歌山大学教育学部紀要*, 41 : 1-15.
- 豊村和真 (2004) 学生の障害児者に対する受容の態度に関する研究 (1). *北星学園大学社会福祉学部北星論集*, 41 : 85-97.
- Tripp,A. French,R. & Sherrill,C. (1995) : Contact theory and attitude of children in physical education programs toward peers with disabilities. *Adapted Physical Activity Quarterly*, 12 : 323-332.
- 安井友康 (2004) : 車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響. *障害者スポーツ科学*, 2 (1) : 25-30.
- 安井友康 (2007) : 小中学校における障害のある児童生徒の体育授業に関する研究ー北海道における実態調査からー. *北海道教育大学紀要 (教育科学編)*, 58 (1) : 165-179.

(2016. 1.18受理)